



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | イエス生誕物語における歴史と虚構：福音書記ルカ思想に関する一考察                                                  |
| Author(s)        | 土屋，博                                                                              |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要，23，1-26                                                                |
| Issue Date       | 1975-03-27                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33389">https://hdl.handle.net/2115/33389</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 23_PR1-26.pdf                                                                     |



# イエス生誕物語における歴史と虚構

——福音書記者ルカ思想に関する一考察——

土  
屋

博

## イエス生誕物語における歴史と虚構

——福音書記者ルカの思想に関する一考察——

土 屋 博

### 一

一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、主としてドイツの新約聖書学界において、ルカ問題が大きくクローズ・アップされ、所謂「暴風を中心」(a storm center)<sup>(1)</sup>になったことの背景には、この問題をめぐる研究方法上の動揺があったと思われる。即ち、ルカ研究における編集史的方法の顕著な成功が、そのような動揺をひき起こしたのである。<sup>(2)</sup>特に、H・コンツェルマンとE・ヘンヒェンによる記念碑的業績は、「ルカによる福音書」と「使徒行伝」を一つのものとして扱う視点を提供した。<sup>(3)</sup>これら二つの文書が、ルカという著者の共通性によって関係づけられなければならないことは、広く認められていたが、今や、それらは、同一著者による二つの相互に独立した著作ではなく、むしろ、はじめから、連続した著作として考えられていたということが明らかにされたのである。このようなルカの意図(思想)は、「救済史」(Heilsgeschichte, history of salvation)という標語に集約されたが、この標語に基づいて

展開された議論は、実際には、神学的価値判断との関連で、かなり複雑な側面を持つにいたった。まず、その経過をふりかえってみよう。

編集史的方法によって福音書記者マルコの思想が問われる時には、そもそも、福音書という文学類型の創造それ自体を思想的営みの表現としてとらえなければならないということは、しばしば指摘されてきた。同様に、ルカが、イエスの生と死だけでなく、さらに、弟子達の活動にまで叙述を展開したことも、当然、ルカの思想と関係していると考えられるであろう。この点において、ルカは、明らかにマルコとは異なった意図を示しており、その背後には、ルカ固有の歴史的状况がうかがわれる。それは、「来臨遅延」(Parusieverzögerung, the delay of the parousia)<sup>(4)</sup>「初期カトリック主義」(Frühkatholizismus, primitive catholicism)<sup>(5)</sup>等々の諸条件の制約下にある状況であった。その中でルカは、自らの歴史的位置を見きわめ、イエスの出来事に対して、新たな意味づけを試みざるをえなかったのである。従来の研究では、そのようなルカの試みを、「歴史」と「神学」を結びつけるための思想的営みとしてとらえるのが常であった<sup>(6)</sup>。そこから、救済史という概念が導き出されることになったわけである。

ところが、このルカの思想傾向をとり出すにあたって、様々な価値判断が加えられるにいたり、事態は複雑になってきた。多くの解釈者達は、「ルカの神学」に関して、低い評価を下した<sup>(7)</sup>。特に、H・コンツェルマンやE・ケーゼマンは、ルカに見られるような、終末論から救済史への変化に対しては、好意を示さなかった。救済史を警戒する風潮の背景には、あるいは、「ドイツ敬虔主義のある形態に対する無言の反発」がひそんでいたのかも知れない<sup>(8)</sup>。しかしながら、他方において、それとは反対に、「ルカの神学」を高く評価する動きもある。U・ヴィルケンスは、W・パネンベルクの思想の影響を受けつつ、ルカを擁護しようとする<sup>(9)</sup>。また、O・クルマンは、自らの基本的立場として、救済

史の問題を積極的に展開した。<sup>(12)</sup> こうして、「ルカの神学」に対する評価は、次第に組織神学論争になっていったのである。勿論、今日でも、新約聖書の中から一つ思想傾向だけを切り離して評価を云々することに反対する古典的立場をとる学者もある。<sup>(11)</sup> 「ルカの神学」の独自性を認めながら、それを新約聖書の中心的宣教に属するものと考える W・G・キーンメルも、結果的には、この立場に近いといえよう。<sup>(13)</sup>

各福音書において、記されている歴史的事実に先立って福音書記者の思想が問われ、しかも、それら相互の差違が認識され始めると、そこにある程度価値判断が働くようになることは避け難いであろう。この場合、「釈義的考察」(exegetical observations)と「神学的信念」(theological persuasions)とが微妙にからみ合ってくるからである。<sup>(13)</sup> 特定の「新約聖書テキストを問題とする以上、「神学的信念」は、「釈義的考察」によって設定された枠を踏み越えるわけにはいかない。勿論、信念をそれ自体として展開することを妨げる理由はないが、そうなると、少なくとも、新約聖書のテキストについて論ずることは無意味になる。他方、「釈義的考察」は、テキストに示された思想の特徴を明らかにすると共に、その思想と歴史の場との相互連関をも探求しなければならない。しかも、そのさいの歴史の場とは、単に政治的、経済的諸関係を意味するだけでなく、諸々のかかわりの中にある人間において統合された形でとらえられるべきであろう。そのような人間は、何らかの価値観を持った全体的存在として、解釈者に相対することになり、その共感と反発をよび起こす。そして、解釈者が立ち向かう相手が、かなり異なった思想を表明する複数の人間であるならば、共感と反発の織成す綾は、より鮮明になるであろう。そこで、必然的に、解釈者の「神学的信念」が前面に立ち現われることになる。

しかしながら、その場合、「神学的信念」という言葉は、果たして適当であろうか。同様に、「ルカの神学」という

言葉も再吟味される必要がある。神学の守備範囲をどの程度に定めるかによって多少変わってくるが、いずれにしても、生きた人間の思想的営みを示すものとしては、この概念がやや狭すぎることは確かである。福音書記者ルカも、解釈者も、必ずしも神学だけを問題にしているのではない。その幅が忘れられ、しかも、神学が、一種の教義問題として矮小化されてとらえられることによって、所謂「ルカの神学」に対する性急な価値判断が出てくることになる。勿論、ルカの意図の中には、かなり明確な形で、神学的要素が含まれているという事実は否定できないが、その要素は、さらに広い概念でとらえられるべき基盤に根ざしているのである。神学に代わる適当な用語を見出すのは困難であるが、せめて、解釈者の「神学的信念」は、一般的な「信念」に、「ルカの神学」は、「ルカの思想」に基づくものとして考えた方がよいであろう。

このように考えると、「歴史家」であると同時に「神学者」である者としてルカをとらえてきた従来のやり方が、果たして適当であったかどうかが問われることになる。ルカには、この二つのカテゴリーだけではおさえきれない側面があるのではないであろうか。E・ヘルヒェンは、「歴史家」、「神学者」に加えて、「著作家」(Schriftsteller)という肩書を記しているが、これは一つの見識である。<sup>(14)</sup> ルカを「著作家」として見るということは、言葉を換えていえば、ルカ文書の文学的側面をありのままに評価しようとすることであり、最近では、そうした試みも現われつつある。<sup>(15)</sup> 文学的動機は、歴史や神学に解消されない自らの内実を持つており、ルカの全体像は、それらの相互媒介によって支えられていると思われる。ルカがそのようなレベルでとらえられた時、救済史的思想も、単に、歴史を包括する神学としてだけでなく、もっと広いかかわりにおける志向として浮かび上がるであろう。

以上のような問題意識をふまえて、ここでは、「ルカによる福音書」第一章―第二章に記されているイエス生誕物

語を、編集史的方法によつて検討してみることにする。後に詳しく述べるように、現代のルカ問題の中で、この箇所は、やや特別な扱いをされており、「ルカの神学」を論ずるさいには、あまりこれに言及せず、この箇所を論ずるさいには、他の箇所あまり言及しないのが常であつた。<sup>(16)</sup>「ルカによる福音書」全体との連関におけるイエス生誕物語の研究は、最近では、主として、カトリック系の学者に委ねられているようである。しかしながら、プロテスタント系学者に見られるこうした傾向のうちには、ルカを思想を神学の面に限定して考えようとする姿勢に基づく一つの盲点が現われているようにも思われるのである。

## 二

「ルカによる福音書」全体の中で、第一章―第二章をどう位置づけるかという問題を考えるにあたっては、まず、様式史的方法に基づく共観福音書研究の成果を一応ふりかえつて、確認しておく必要がある。それによれば、この箇所は、断片的な民間伝承に分解される。そのうちのいくつかは、かなり定型的な記述であり、宗教史的に見ると、類似的の伝承が他の宗教にも存在することが明らかになる。このような判断は、伝承の成立過程に関する限りでは、今日でも、大筋において支持されるものであろう。

R・ブルトマンは、第一章と第二章が元来つながっていなかったということを強調した。<sup>(17)</sup>確かに、二つの章の間に非連続性を認めることも可能であろう。しかし、それは、各々の章が独自のまとまりを形成していたためではなく、様々な伝承を集めるにさいして、たまたまそこに、内容的に一つの切れ目ができたということにすぎないと思われる。むしろ、さしあたり、第一章―第二章をつなげたものとして考え、福音書記者による個々の伝承の配列に基づ

いて、その区分を試みた方がよいのではないであらうか。<sup>(18)</sup>

第一章の内容は、大まかにいえば、バプテスマのヨハネ生誕の記事とイエス生誕の預言とを人為的に結合することによって構成されている。ヨハネ生誕以前の出来事の伝承は、元来洗礼者教団に由来するものと考えられ、セム的色彩を帯びているが、最初アラム語で伝えられたものであるかどうかは、結局、決定し難いようである。<sup>(19)</sup> それに対して、処女マリヤへの受胎告知の記事（一・二六―三八）は、「マタイによる福音書」一・一八―二五と同様に、ヘレニズム的背景を持つている。<sup>(20)</sup> 原始教団は、ヨハネに対するイエスの優越性を示す意図の下に、これら二つの伝承を結びつけ、さらに、ヨハネの母エリサベツとイエスの母マリヤとの出会いの場面を作り出したのである。<sup>(21)</sup> 「マリヤの讃歌」(Magnificat)（一・四六―五五）と「ザカリヤの讃歌」(Benedictus)（一・六七―七九）は、それぞれ独立した断片で、ユダヤ教の終末論的讃歌から、若干の付加と変更をともなつて採用されたものと考えられる。<sup>(22)</sup>

さらに、第二章も、いくつかの断片に分けられる。まず、イエス生誕の記事（二・一―二〇）があり、皇帝の人口調査と結びつけられているが、この結合は二次的とみなされう。おそらく、編集者によるものであらう。一四節における「天使の讃歌」(Gloria in Excelsis)<sup>(24)</sup> がアラム語のひびきをこどめていることを除けば、伝承全体は、ヘレニズム的背景から理解される。それに続くシメオンとアンナの記事（二・二二―四〇）も、元来独立した伝承で、現在の文脈への挿入は二次的と考えられる。「シメオンの讃歌」(Nunc Dimittis)<sup>(25)</sup>（二九―三二）とシメオンの言葉（三四―三五）との間の伝承史的関係については、種々の推定がなされうであらう。第二章の最後に置かれている一二才のイエスの記事（二・四一―五二）が独立した伝承であることは明らかであり、新約聖書外典に属する「トマスによるイエスの幼時物語」に、同様の趣旨の伝承が誇張された形でとり入れられている。<sup>(26)</sup> 第二章の記事の内容を宗教史的に



考察すると、これと類似した物語を他の宗教の伝承の中にも見出すことができる。ギリシャ、エジプト、インド等において、類例が指摘されうことは、よく知られている通りである。<sup>(27)</sup>

このように、様式史的方法に基づく研究によれば、「ルカによる福音書」第一章―第二章は、元来独立していたいくつかの伝承の比較的ゆるやかながりであることが明らかになった。そのさいに、伝承をつなげる作業は、当然編集者に帰せられた。例えば、一・五六、八〇、二・二一、三九、四〇、四一、五一、五二等は、まとまった伝承の前後に置かれた短い記述であり、時と場所の経過を示しながら物語の連続性を成り立たしめているので、何らかの形で編集者の手が増えられたものである可能性が強いことになる。<sup>(28)</sup> また、前述のように、二・一―五は、編集者による構成であり、三・一―二に対応しているようにも見える。しかしながら、様式史的方法では、編集作業の所在が指摘されるにとどまり、そのような編集者の手法が如何なる意図に由来するかということとは深く問われない。その意図を福音書全体を貫く意図との関係において問題とするためには、編集史的方法に基づく研究をまたなければならなかった。

ところが、編集史的方法をルカ研究に適用し、画期的な業績を上げたH・コンツェルマンは、「ルカによる福音書」第一章―第二章（プロローグを除く）に関して、新たな問題を提起することになった。即ち、H・コンツェルマンは、福音書記者ルカの思想を考えるにあたって、そのための材料から、この箇所を除いてしまっているように見えるのである。そうすると、第一章―第二章におさめられている諸伝承を編集した人物は、福音書記者ルカと同一ではないという可能性が出てくる。もっとも、『時の中心』(Die Mitte der Zeit, 1954)においては、「ルカによる福音書」は元来第三章から始まっていたのかも知れないということが示唆されただけで、決定は避けられている。しかし、そ

のような推定を支える論拠については、折にふれて、様々な角度から述べられる。それらをまとめてみると、おおよそ次のようになる。

(一)「使徒行伝」一・一一は、生誕、幼児物語を含まない福音書をさしているように見えるし、「使徒行伝」中の演説で、旧約聖書の成就を証明する場合にも、生誕にはふれていない。<sup>(29)</sup> おそらく初期には、イエスの生誕は、教団の信仰告白の内容とはなっておらず、イグナティオスとローマ信条において、はじめてとり入れられたのである。<sup>(30)</sup>

(二) ルカは、第三章以下では、ヨハネとイエスの活動領域を明確に分け、ヨハネをヨルダンに、イエスをガリラヤ、ユダヤに限定しているが、第一章では、ヨハネは、ユダヤと結びつけられている。<sup>(31)</sup>

(三) 第三章以下では、ルカは、ヨハネを来臨の先駆者・エリヤと見る見方をとらず、預言者の最後の者と見ているが、一・一七、七六は、それと矛盾する内容を述べている。<sup>(32)</sup>

この外、第一章と第二章にだけ見られる特殊な表現が指摘されているが、主たる論拠は、以上の三点である。<sup>(33)</sup>

しかし、それに対して、第一章―第二章の編集と第三章以下の編集との連続性を示すような箇所もないわけではない。それらも考慮に入れざるをえないので、H・コンツェルマンは、決定を保留するのであろう。例えば、一・八〇は、ヨハネがイスラエルに現われる日まで荒野にいたと述べており、三・二―三の記述と対応する。<sup>(34)</sup> さらに、第二章の記述は、いくつかの点で、受難物語と対応する。<sup>(35)</sup> ただし、対応が存在するということは、実は、必ずしも、全体がルカの編集として一貫しているということを示す決定的論拠とはならない。逆に、第一章―第二章の編集者が、第三章以下の記述に合わせて、後から対応する箇所を作り上げたということもありうるからである。また、それとは別

に、第一章―第二章の記述と第三章以下の記述との間には、若干の共通した表現や概念も見出される<sup>(36)</sup>。その中には、確かに、ルカの色采を帯びたものがあるが、前の伝承の名残りであるという可能性を全く除去してしまうことはできないであろう。ともかく、連続性の論拠は弱いのであるから、H・コンツェルマンが、前述の非連続性の論拠にこだわる限り、福音書記者ルカの思想を判断するための材料として、プロローグ以外の第一章―第二章の編集作業を重視しないという方に傾いていくのは当然といえよう。

もっとも、第一章―第二章を第三章以下から切り離し、別な伝承段階を推定するというだけであれば、かつてB・H・ストリーターやV・テイラーによって唱えられた「プロト・ルカ仮説」(The Proto-Luke Hypothesis)と類似しているようにも見える<sup>(37)</sup>。それによれば、ルカは、「プロト・ルカ」(Q+L)を基本資料とし、それにマルコからの抜粋と誕生、幼時物語を付け加えて、現在の福音書を作成したと考えられたのである。しかし、H・コンツェルマンは、この仮説をとらず、マルコがルカの基本資料であるといういわば今日の常識を確定した上で、議論を進めている<sup>(38)</sup>。従って、「プロト・ルカ仮説」が支持を得ていなくても、それとは別に、H・コンツェルマンの説は検討に価する<sup>(39)</sup>。問題は、前述の論拠が、編集史的視点から見ても、どこまで妥当性を有するかということである。

現在までのところ、H・コンツェルマンの説をめぐって賛否両論があるが、決定的な論述は現われていない。H・H・オリヴァー<sup>(40)</sup>、P・S・マイネア、W・ウィング<sup>(42)</sup>等英米の学者達は、一般に、H・コンツェルマンの説には反対している。しかし、反論がなされる場合にも、必ずしも、前述の論拠がすべてしりぞけられうるとは限らない。H・コンツェルマン自身は、議論が十分に出つくしていないとしながらも、最近では、「ルカによる福音書」第一章―第二章は、第三章以下よりもおかれてはいるが、ルカによって付け加えられたものであるという考えに傾いてきたよう

である。<sup>(43)</sup> なお、前にもふれたように、この箇所に関しては、近年、R・ローランタン<sup>(44)</sup>、J・リードル<sup>(45)</sup>、H・シュールマン<sup>(46)</sup>等のカトリックの学者達が、主として伝承史の見方に基づく労作を相次いで発表した。彼等の共通した関心は、ルカだけでなく、マタイをも含めた生誕伝承そのものに向かつていように見える。ここでは、単に、キリスト論やマリヤ論が問われているだけでなく、伝統と歴史との関係が問われているのである。<sup>(47)</sup> しかし、この場合には、カトリックの問題意識が釈義をとびこえていないかどうかという点に、たえず注意が向けられねばならない。

### 三

「ルカによる福音書」全体の中で、第一章―第二章がその他の章とどのように関係しているかという問題をめぐる議論は、大局的に見れば、二つの視点に集約して考えることができる。一つは、用語、文体、構成等から論ずる視点であり、もう一つは、思想内容から論ずる視点である。勿論、両者が相互に関連していることはいうまでもないが、H・コンツェルマンの主張も、それに対する反論も、一応これら二つの視点から整理してみると、問題の性格がより鮮明になると思われる。

まず、用語、文体、構成等から第一章―第二章を検討してみよう。生誕、幼児物語に含まれている用語の中に、ルカの著作の特徴を示すものがあることを、実例をあげて詳細にあとづけようとした古典的研究は、A・プランマー<sup>(48)</sup>のものである。P・S・マイネアは、この分析が現在もなお通用すると主張する、<sup>(49)</sup> 確かに、指摘されている事実そのものは、さほど大きな変更を必要としないかも知れないが、問題は、それらの用語の中のどれだけが福音書記者ルカに帰せられるかということである。伝承の段階で共通した用語があることを指摘しても、それは、各々の伝承が成立し

た場が比較的近いことを示すだけで、H・コンツェルマンの問題提起に答えたことにはならない。さらに、R・モルゲンターラーの研究に対しても、同様のことがいえる。ここでは、二・一―二〇が、用語の統計的分析を適用すべき例としてとり上げられており、その分析に基づいて、この部分が元来「ルカによる福音書」に属していたことが主張されている。<sup>(50)</sup> R・モルゲンターラーによれば、二・一―二〇だけに現われる特殊な言葉は反証にはならず、むしろ、顕著なルカの表現がその主張を支えるのである。A・プランマーやR・モルゲンターラーが指摘するカル特有の表現は、今日、各々の成立段階に即して再吟味されなければならないが、その中には、編集史的方法を経由しても、なお残りうるものもあると思われる。そこで、はじめて、そのような表現が、H・コンツェルマンに対する反論を試みるさいの論拠の一つになりうるわけである。<sup>(51)</sup>

用語、文体に関する議論は、しばしば、思想内容に関する議論と無意識のうちに結びつき、用語、文体を論じているように見えても、実は思想内容を論じている場合がある。しかし、事実の認定にさいしては、価値評価を含んだ判断は、さしあたり、できる限り避けなければならない。思想内容に関する議論は、それとして意識的にとり上げられるべきであろう。H・コンツェルマンの説を批判したものとしては、比較的早い時期に発表されたH・H・オリヴァーの論文は、第一章に現われた“*ποσφύτης ἐβόλον*” (一・七六)、“*ἐὶς σὸς ἐβόλον*” (一・三三)、“*ὁβανὺς ἐβόλον*” (一・三五)等の言葉を手がかりに、この部分と第三章以下との連続性を主張する。<sup>(52)</sup>ところが、純粹に用語の問題として見た場合、これらの言葉がどのようにして連続性を根拠づけるのかは、必ずしもはっきりしないのである。また、記述に現われる人名も、一種の用語として扱われうるが、イエスの母マリヤの名が特に重視される時、やはり、内容的判断が先行しているという印象を受ける。例えば、R・ローランタンは、マリヤを「最初の証人」、ルカを「最終的編

集者」としてとらえることによって、両者の本質的連関を考えようとする。<sup>(56)</sup> マリヤ問題に関しては、カトリックの学者達は、大体同様な傾向を有しており、<sup>(58)</sup> ここには、カトリック的釈義のディレンマが見られるようである。<sup>(59)</sup>

「使徒行伝」をも含めたルカの著作全体の構成の中で、「ルカによる福音書」第一章―第二章がどのような位置づけを得るかという問題は、まさしく思想内容と密接な関連を持っているが、とりあえず、ごく外見のことだけを整理しておこう。確かに、H・コンツェルマンが指摘するように、「使徒行伝」一・一二で、「ルカによる福音書」の内容が語られるにさいしては、生誕、幼児物語には言及されていない。<sup>(60)</sup> “*hōsauto d' i' nōdōs poiētē te kai dōdōken*” という表現から、生誕物語の内容まで読みとめることは困難であろう。また、「使徒行伝」中の演説にも、直接生誕、幼児物語にふれたものはない。J・リードルは、一三・二三―二五に記されたパウロの演説が生誕物語をさしているというが、<sup>(61)</sup> むしろ、実際には、「ルカによる福音書」第三章の記述と一致するのである。<sup>(62)</sup> これらの観察から、二通りの推定がなされうる。一つは、H・コンツェルマンのように、生誕、幼児物語を後から付け加えられたものと推定することであり、もう一つは、ルカが、生誕、幼児物語を、イエスの生前の伝承や「使徒行伝」に記された伝承とはやや異質のものとしなしていたと推定することである。第一の推定は確かに考え易いが、第二の推定の可能性も一応保留しておく必要があるであろう。

要するに、用語、文体、構成等に関する議論は、今のところ、第一章―第二章が元来第三章以下と結びついていたかどうかを決定するための最終的きめ手を提供することはできないようである。生誕、幼児物語の背後に、多かれ少なかれまとまりをなした伝承資料が存在することは、様式史的方法に基づく研究以来今日まで、何人かの学者によって指摘されてきた。もっとも、それがどのような性格のものであるかということについては、今なお説が分かれてい

るが、その問題は、さしあたり、決着をつける必要はない。<sup>(58)</sup> 叙述内容の史実性に関心をよせる場合には、伝承資料の性格の探求も意味を持つであろうが、編集史的方法によれば、関心の対象は福音書記者であるので、伝承資料そのものよりも、まず、それを福音書記者がどう取り扱ったか、あるいは、取り扱わなかったかということの方が問われるからである。しかしながら、伝承資料が存在するというだけでは、生誕、幼児物語の特殊性を示す根拠にはなるが、これをルカの編集作業から切り離す根拠にはならない。生誕、幼児物語も、伝承資料そのままではなく、編集作業の結果、現在のような形をとるにいたったという事実は、おそらく否定できないと思われるので、問題は、その編集作業がルカの編集作業と一致するかどうかである。そうなると、結局、思想内容が問われなければならないことになる。

そこで、次に、思想内容に立ち入って、第一章—第二章を検討してみよう。その場合、思想内容には、伝承の段階に従って、いくつかのレベルがあり、それらが編集者の思想に集約されていることに注意しておく必要がある。というのは、伝承資料の思想と編集者の思想との間に微妙な葛藤が生じる場合もありうるからである。しかし、最終的形態においては、もし修正がなされていなければ、編集者の思想は伝承資料の思想を包みこんでいるのではないかと一応は考えてみるべきであろう。「ルカによる福音書」は元来第三章から始まっていたのかも知れないというH・コンツェルマンの推定を支える論拠は、前述のように、主として、編集者ルカの思想と第一章—第二章の伝承資料の思想との間の矛盾である。即ち、H・コンツェルマンは、ルカの著作全体から明らかにしえたと信ずる神学的図式が第一章—第二章にはうまくあてはまらないということから、この部分の思想的異質性を導き出すとするのである。ただし、そのさいに、第一章—第二章の編集者の思想が積極的に提示されているわけではなく、「ルカの神学」がここ

には見られないという消極的な指摘にとどまっている。しかしながら、果たして、生誕、幼児物語は、ルカの思想にとってそれほど疎遠なものであったであろうか。生誕物語は、「ルカの救済計画 (Heilsökonomie)」においては、何の役割も演じない<sup>(89)</sup>」のであろうか。

H・コンツェルマンの論拠のうち、主な二つ、即ち、ヨハネとユダヤ及びヨハネと先駆者の問題は、いずれも、ヨハネとイエスを時の区分に應じてはつきりと分かつ図式を、「ルカの神学」として想定することに基づいている。H・コンツェルマンによれば、ヨハネの時とイエスの時とは、ルカでは、救済史的に見て、別な時なのである。このような所謂「線的救済史」の図式を「ルカの神学」としてとり出すことは、結論的には正しいとしても、実際の福音書叙述においては、時の区分は、果たして、どこまで截然と貫徹されうるものであろうか。これまで、H・コンツェルマンの説に対して反論を試みた学者達の多くは、この点についてはあまり疑いをいだかず、もっぱら、第一章―第二章においても、ヨハネとイエスは第三章以下と同様に描かれているのだということを証明しようとしているように見える<sup>(90)</sup>。しかし、福音書という文学類型は、そもそも、教義学的内容を正確に述べるのには適しない。それは、出発点においては、教義に解消されないイエスの生を描くために創り出されたものと考えられる<sup>(91)</sup>。福音書記者達の中では、ルカは、比較的神学的立場を明瞭に表現している方であるが、それでもやはり、その記述は、福音書という文学類型の制約を受けていると思われる。従って、ある神学的図式によりながらも、それが必ずしもすみずみまで滲透していないということに、むしろ、福音書記者ルカの思想の特徴を見えるという可能性も残されているのである<sup>(92)</sup>。

H・コンツェルマンの著作においては、ヨハネの時とイエスの時をはっきり区分するというルカの思想の表現として、一六・一六の言葉がしばしば引用される。確かにそこでは、ヨハネは、律法と預言者に属し、神の国の宣教から



は切り離されているように見える。

“ὁ νόμος καὶ οἱ προφῆται μένει Ἰουδαίου ἀπὸ τότε ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ ἐπαγγελῆσαι καὶ πᾶς εἰς αὐτὴν  
βαλέσθαι.” (一六・一六、傍線は筆者)

しかし、H・コンツェルマンも認めているように、この言葉は、おそらく伝承からとられたものであり、福音書記者ルカは、むしろ、続く一七節によって、意図的にこれを修正したと考えられる。<sup>(63)</sup>ここでは、前節における非連続性の主張に対して、どちらかといえば、連続性が主張されているように見える。<sup>(64)</sup>

“ἐκπαιδεύου δέ σοι τοὺς οὐρανὸν καὶ τὴν γῆν παραθεῖν ἡ τοῦ νόμου μίαν κερταίαν πρὸς σε.” (一六・一七)

このような編集のやり方から判断すれば、ルカの頭の中では、ヨハネとイエスの関係は、単純に非連続なものとして割り切れてはいない。洗礼者教団と原始キリスト教団との歴史的なかわりを考えれば、それは、いわば当然のことであったし、福音書記者としてのルカは、具体的把握をのりこえてまで、神学的定式化へと進む意図は持ち合わせていなかったであろう。従って、ルカは、第三章以下の編集作業に現われているように、ヨハネとイエスを「活動」の面では明らかに区別しようとしているが、「存在」としては、連関のうちに見ざるをえないのである。H・コンツェルマンは、このことに気付いてはいるようであるが、その認識を結論の中で生かそうとはしない。

「ルカによる福音書」におけるヨハネの時とイエスの時の区分は、さほど図式的なものではなく、福音書記者としてのルカが具体性へ傾斜することによって、しばしばその境界がぼけるとするならば、思想内容によって第一章―第二章を第三章以下から切り離すという主張は、論拠を失うことになる。ただし、そうであるからといって、P・S・マイネアのように、ルカの救済史観そのものを解きほぐしてしまう必要はない。<sup>(65)</sup>「ルカの神学」に関するH・コンツ

イエスの生を描こうとした。しかし、結果的には、そこに描かれたイエスも、必ずしも忠実そのままではない。現実を写すということのうちにも、不可避的に虚構が入りこむとすれば、逆に、虚構を描くことによって現実に迫ろうとする試みが現われてきても不思議ではない。ルカは、福音書というものに元来含まれていたこのような性格を積極的に展開したといえるであろう。ここに、マルコのリアリズムとは異なったルカの救済史観の根本的動機があると思われる。生誕、幼時物語では、この動機は、御伽噺的構成を基礎づけているが、時によっては、同じ動機が、伝承のうちに存在するある固有の側面を鋭く浮かび上がらせることもありうる。<sup>(68)</sup>ルカは、固定化した救済史図式にしがみついているわけではなく、虚構の救済史観を通じて、いわば歴史と戯れることによって、本質的なものを提示しようとする。ルカを「歴史家」や「神学者」としてではなく、「著作家」としてとらえなおす時、このような性格が明らかになってくるのではないであろうか。

従来、ルカは、しばしば、所謂「初期カトリック主義」の最初の代表者とみなされ、<sup>(69)</sup>それなるが故に、プロテスタント神学者からの批判をもちうむってきた。しかし、おそらく、当時としては比較的自由な知識人であったと想像されるルカが、教会組織や教義体系の形成にそれほど関心を持っていたであろうか。「使徒行伝」から知りうる限りでは、ルカにとって、教会は、いつでも「個々の教会」(Einzelgemeinde, the local church)を意味していた。<sup>(70)</sup>そこでは、はっきりした輪郭を持った統一的な教会概念は確認されず、教会的集まりは、変化に対して開かれており、常に新しい。<sup>(71)</sup>ルカにおいては、統合された教会組織は、虚構としての幻のうちにとどまっているのである。従って、原始キリスト教史におけるルカの立場は、元来、牧会書簡の著者の立場とは異なっていた。ところが、自由人ルカによって担われていた思想が、あらゆる面における制度化の波の中で、それを支えるイデオロギーとしてとらえなおされ

た時、虚構が虚構なるが故に持ちえた鋭さは失われ、「初期カトリック主義」の最初の代表者としての役割がルカに帰せられていったのであろう。

注

- (1) W. C. van Unnik, "Luke-Acts, a Storm Center in Contemporary Scholarship," L. Keck and J. L. Martyn (eds.), *Studies in Luke-Acts: Essays Presented in Honor of Paul Schubert*, (Abingdon, 1966), London, 1968, p. 15-32. その八年前に、E. ケーゼマンが、「突然燃え上がったルカ問題」について語っている。E. Käsemann, *Exegetische Versuche und Besinnungen*, I, Göttingen, 1960, S. 8.
- (2) 編集史的方法が提唱されて以来二〇年になるが、それが最も重点的に適用された共観福音書研究の領域においても、その成否の度合には、対象によって若干の差がある。その中で、ルカに対する適用が一番成功をおさめてきたことは、広く認められるであろう。
- (3) H. Conzelmann, *Die Mitte der Zeit: Studien zur Theologie des Lukas*, Tübingen, (1954), 1964<sup>5</sup>, H. ノン・ヘルマン『時の中心——ルカ神学の研究』、田川建三訳、新教出版社、一九六五年。idem, *Die Apostelgeschichte (Handbuch zum NT)*, Tübingen, 1963. E. Haenchen, *Die Apostelgeschichte (Kritisch-exegetischer Kommentar*

*über das NT)*, Göttingen, (1956<sup>10</sup>), 1965<sup>14</sup>.

- (4) E. Grässer, *Das Problem der Parusieverzögerung in den synoptischen Evangelien und in der Apostelgeschichte*, (BZNW XXII), Berlin, 1957.
- (5) Ph. Vielhauer, "Zum 'Paulinismus' der Apostelgeschichte," *Ev Th* 10, 1950/51, S. 1-15, *Aufsätze zum Neuen Testament*, München, 1965, S. 9-27.
- (6) W. C. van Unnik, *op. cit.*, p. 23 f. cf. C. K. Barrett, *Luke the Historian in Recent Study*, (London, 1961), Philadelphia, 1970. I. H. Marshall, *Luke: Historian and Theologian*, Devon, 1970.
- (7) U. Wilckens, "Interpreting Luke-Acts in a Period of Existentialist Theology," L. Keck and J. L. Martyn (eds.), *op. cit.*, p. 60.
- (8) W. C. van Unnik, *op. cit.*, p. 28.
- (9) U. Wilckens, *op. cit.*, p. 76 f. cf. W. Pannenberg (hrsg.), *Offenbarung als Geschichte*, Göttingen, (1961), 1965<sup>8</sup>.
- (10) O. Cullmann, *Heil als Geschichte: Heilsgeschichtliche*

*Existenz im Neuen Testament*, Tübingen, 1965.

- (11) I. H. Marshall, *op. cit.* は、この立場をとっている。
- (12) W. G. Kümmel, "Luc en accusation dans la théologie contemporaine," *Ephemerides Theologicae Lovanienses*, XLVI, 1970, p. 265-281, "Lukas in der Anklage der heutigen Theologie," *ZNW* 63, 1972, S. 149-165. cf. idem, *Die Theologie des Neuen Testaments: nach seinen Hauptzeugen* (NTD *Ergänzungsreihe* 3), Göttingen, 1969.
- (13) U. Wilckens, *op. cit.*, p. 60.
- (14) E. Haenchen, *op. cit.*, S. 81 ff.. 「著作家」(Schriftsteller) をさらに詳しく言えば、「信仰的著作家」(Erbauungsschriftsteller) となる (S. 93)°
- (15) E. Plümacher, *Lukas als hellenistischer Schriftsteller: Studien zur Apostelgeschichte*, Göttingen, 1972. これは、「使徒行伝」とくハニエス文学との関係を探究したものである。
- (16) P. S. Minear, "Luke's Use of the Birth Stories", L. Keck and J. L. Martyn (eds.), *op. cit.*, p. 111. 「前物語」(Vorgeschichte) という従来の呼び方が、すでに、この箇所が特別視されてきたことを示しているが、編集史的方法に基づいてルカ研究は、さらにその見方を強めた。もっとも、「ア

タイによる福音書」の「前物語」は、ルカとは異なり、比較的緊密に、福音書全体の中に位置づけられうるものとみなされているようである。内容的に見れば、二つの「前物語」は、いくつかの共通する基本的要素を除いて、全く相互に独立したものであるが、編集史的方法によれば、さらに、両者が各々の福音書の中で果たしている機能も異なることになるのであろうか。

- (17) R. Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, (1921), Göttingen, 1961<sup>5</sup>, S. 320. R・ブルトマンは、三つ乃至四つの理由をあげて、このことを主張している。
- (18) H・シュールマンは、神学的図式による区分を示唆している° H. Schürmann, *Das Lukasevangelium* (*Herders theologischer Kommentar zum Neuen Testament*, Band III), Erster Teil (Kommentar zu Kap. 1, 1—9, 50), Freiburg, 1969, S. 24.
- (19) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 321. しかし、M・デイヤリウスは、これを元来ラウイ語で伝えられたものと考えた。M. Dibelius, "Jungfrauensohn und Krippenkind. Untersuchungen zur Geburtsgeschichte Jesu im Lukasevangelium," (*Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissensch. Phil. hist. Klasse*; Abh. 4, 1932), *Botschaft*

und Geschichte, I, Tübingen, 1953, S. 8. cf. Ph. Vielhauer, "Das Benedictus des Zacharias (Lk. i. 68-79), ZThK 49, 1952, S. 255-272, Aufsätze zum Neuen Testament, München, 1965, S. 28-46.

- (20) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 322. 1・三四—三五を元来の伝承に属するものとみなすがどうかについては、議論がある。M. Dibelius, *op. cit.*, S. 12 Anm. 14. idem, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, Tübingen, (1919), 1966<sup>s</sup>, S. 121.

- (21) 1・三九—四五をすべて福音書記者ルカに帰するM・ディベリウスの見解には、多少無理があると思われる。M. Dibelius, *Botschaft und Geschichte*, I, S. 13f..

- (22) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 322. M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, S. 122. これは、H・グンケルに始まる見解であるが、他方、これらの讃歌は、ルカによつてギリシア語で書かれたとするA・V・ヘルナツクに始まる見解もある。また、近年では、両者を調停する試みもなわれている。D. R. Jones, "The Background and Character of the Lukan Psalms," *JThS*, N. S. 19, 1968, p. 19-50.

- (23) K. L. Schmidt, *Der Rahmen der Geschichte Jesu: Literarkritische Untersuchungen zur ältesten Jesusüberlieferung*, (1919), Darmstadt, 1964, S. 312 f.. R. Bultmann,

*op. cit.*, S. 323. M. Dibelius, *Botschaft und Geschichte*, I, S. 55.

- (24) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 325. f..

- (25) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 326 f.. M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, S. 122-124.

- (26) 「トマスによるイエスの幼時物語」 八木誠一抄訳、『新約聖書外典』(《聖書の世界》別巻三・新約I)、講談社、一九七四年、一九—三五頁。ただし、この訳では、「ルカによる福音書」二・四—五二に対応する部分(一九)は省略されている。

- (27) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 323-328. M. Dibelius, *op. cit.*, S. 124.

- (28) K. L. Schmidt, *op. cit.*, S. 310-314. 本稿では、1・1—14のプロローグは、一応考察の外におかれている。これについては、別稿で論ずる予定である。

- (29) H. Conzelmann, *Die Mitte der Zeit*, S. 9 Anm. 2, 160 Anm. 1. 田川建三訳、二七頁注二、一九〇頁注三。

- (30) *ibid.*, S. 4 Anm. 1. 田川建三訳、一八頁注四。cf. S. 16. 田川建三訳、三五頁。

- (31) *ibid.*, S. 14 Anm. 3. 田川建三訳、三六頁注七。

- (32) *ibid.*, S. 16 Anm. 2. 田川建三訳、四四頁注一。

- (33) *ibid.*, S. 18 Anm. 1, 82 Anm. 1, 108 f., 171 Anm. 2.

田川建三訳、四六頁注五、一五五頁注三、一九六頁以下、三〇九頁注三四。

(34) *ibid.*, S. 12 Anm. 1. 田川建三訳、三五頁注一。

(35) *ibid.*, S. 68 f. Anm. 5. 田川建三訳、一三三頁注五。第一章の記述と受難物語との対応は次の通りである。一・七→一二・一一、二・一四→一九・三八、二・三八→二三・五一等。

(36) *ibid.*, S. 143 Anm. 4, 150, 153 Anm. 1, 207. 田川建三訳、一五九頁注八、二六九頁、二七八頁注二、三六八頁以下。

(37) P. Feine-J. Behm-W. G. Kümmel, *Einleitung in das Neue Testament*, Heidelberg, 1964<sup>14</sup>, S. 82 f.. 高柳伊三郎「プロト・ルカ仮説について」青山学院大学基督教学会編『福音書研究』(高柳伊三郎教授獻呈論文集)、創文社、一九六七年、六九—九二頁。

(38) H. Conzelmann, *op. cit.*, S. 16 Anm. 1. 田川建三訳、三八頁注一四。

(39) 今日、編集史的方法をふまえた上で、なおも資料批判の問題を考えようとした研究としては、T. Schramm, *Der Markus-Stoff bei Lukas: Eine literarkritische und redaktionsgeschichtliche Untersuchung*, Cambridge, 1971.

(40) H. H. Oliver, "The Lucan Birth Stories and the Purpose

of Luke-Acts", *NTS* 10, 1963/64, p. 202-226.

(41) P. S. Minear, *op. cit.*,

(42) W. Wink, *John the Baptist in the Gospel Tradition*, Cambridge, 1968.

(43) H. Conzelmann, "Literaturbericht zu den synoptischen Evangelien," *ThR*, N. F. 37, 1972, S. 266.

(44) R. Laurentin, *Struktur und Theologie der lukanischen Kindheitsgeschichte*, Stuttgart, 1967.

(45) J. Riedl, *Die Vorgeschichte Jesu: Die Heilsbotschaft von Mt 1-2, und LK 1-2*, Stuttgart, 1968.

(46) H. Schürmann, *op. cit.* cf. idem, *Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zu den synoptischen Evangelien*, Düsseldorf, 1968, S. 198-208.

(47) H. Conzelmann, *op. cit.*, S. 258 f..

(48) A. Plummer, *The Gospel according to S. Luke (The International Critical Commentary)*, Edinburgh, (1896), 1956<sup>5</sup>, p. xli-lxx.

(49) P. S. Minear, *op. cit.*, p. 112 f..

(50) R. Morgenthaler, *Statistik des neutestamentlichen Wortschatzes*, Zürich, 1958, S. 62 f..

(51) 例えば、ル・モルガントーラーは、一一・四、六の "διὰ τὸ εἶναι," "ἐν τῷ εἶναι" という表現に、ルカの獨自性が現

られると考える。統計的分析によれば、定冠詞をともなった *evangelion* は、マタイ、マルコ、ヨハネでは現われず、パウロに現われるが、そのさいには、前置詞は、しばしば *eis* なのである。第二章初めの部分に編集者の手が加わっていることは、編集史的方法によっても確認されているので、R・モルゲンタラーのこの指摘は、今日もなお有効なものであらう。

(52) H. H. Oliver, *op. cit.*, p. 215-226.

(53) R. Laurentin, *op. cit.*, S. 23.

(54) J. Riedl, *op. cit.*, S. 12 f. H. Schürmann, *Das Lukas-evangelium*, S. 60 ff.

(55) H. Conzelmann, *op. cit.*, S. 264. マリヤを一つの人名として見る限り、その用い方は、むしろ、第一章—第二章の特殊性を示す。即ち、ここでは、マリヤという名は、「一二回用いられているが、ルカの著作のそれ以外の箇所では、「使徒行伝」一・一四で一回用いられているだけである。さらに、「ルカによる福音書」八・一九—二二、一一・二七—二八（ルカのみ）に現われたイエスの母に対する見方は、あまり好意的ではなく、第一章—第二章の記述とは対照的である。

(56) J. Riedl, *op. cit.*, S. 12.

(57) 「ルカによる福音書」第三章は、ペンテスマのヨハネの登場とイエスの登場を描いており、それにもなつてイエスの系図が出てくるので、ここが福音書の始めであっても、物語

イエス生誕物語における歴史と虚構

の構成としてはおかしくない。cf. M. D. Johnson, *The Purpose of the Biblical Genealogies: with Special Reference to the Setting of the Genealogies of Jesus*, Cambridge, 1969, p. 235 ff.

(58) 新しい研究としては、R・ローランタンが、ヘブル語の資料を想定している。彼は、生誕物語をミトラシエとして解釈しようとする。R. Laurentin, *op. cit.*, S. 13-24. cf. P. Winter, "The Cultural Background of the Narrative in Luke I and II," *JQR*, N. S. 45, 1954, p. 159-167, 1955, p. 230-242.

(59) H. Conzelmann, *Die Apostelgeschichte (Handbuch zum Neuen Testament)*, Tübingen, 1963, S. 20.

(60) H. H. Oliver, *op. cit.*, p. 216-219. W. Wink, *op. cit.*, p. 79 ff.

(61) 田川建三『原始キリスト教史の一断面——福音書文学の成立』、勁草書房、一九六八年。拙稿「福音書記者マルコのイエス理解」、北海道大学『文学部紀要』二〇ノ二、一九七二年、二二—二五九頁。同「黙示文学の思想と福音書の成立」、日本宗教学会『宗教研究』二二五、一九七三年、九九—一二二頁。

(62) 本稿では、「ルカの神学」が「ルカの思想」の限定された表現とみなされていることは前述の通りであるが、そもそも、

「福音書記者の神学」という表現は、あまり適当ではないと思われる。

- (63) H. Conzelmann, *Die Mitte der Zeit*, S. 17. 田川建三訳、四〇頁。cf. W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas (Theologischer Handkommentar zum Neuen Testament)*, Berlin, (1961<sup>2</sup>), 1971<sup>6</sup>, S. 323 f.. P. S. Minear, *op. cit.*, p. 121 ff.. 勿論、一七節全体をルカによる作文と考える必要はない。多分、これも、伝承からとった言葉であろう (cf. Mt. v. 18)。
- (64) 一六節と一七節との間に若干の矛盾があることは、すでに早くから気付かれていた。マルキオンでは、一七節の “*τοῦ νόμου*” は、“*τῶν λόγων μου*” となつてゐる。またリネウスは、“*τοῦ νόμου μου*” という形を推測している。
- (65) P. S. Minear, *op. cit.*, p. 125.
- (66) ここで用いられている「虚構」という言葉は、決して「虚偽」を意味しない。虚構によつて初めて語りうるような真実も存在するのである。
- (67) ルカの救済史観は、イエスの宣教活動を中心にして構成されており、前後の記述、即ち、生誕、幼児物語と教団の歴史は、各々この中心との関連において描かれてゐると思われる。
- (68) G・タイセンによれば、ルカは、イエスの言葉の倫理的ラ

ディカリズムを最も忠実に保存しながら、自らは、それに対して距離をとつてゐる。G. Theißen, “Wanderradikalismus: Literatursoziologische Aspekte der Überlieferung von Worten Jesu im Urchristentum,” *ZThK* 70, 1973, S. 245–271, 特に S. 270.

- (69) E. Käsemann, “Neutestamentliche Fragen von Heute,” *ZThK* 54, 1957, S. 1–21, *Exegetische Versuche und Besinnungen*, II, Göttingen, 1964, S. 11–31. 特に S. 29.
- (70) E. Haenchen, *op. cit.*, S. 83 f.. cf. C. K. Barrett, *op. cit.*, p. 74 f..
- (71) E. Schweizer, *Gemeinde und Gemeindeordnung im Neuen Testament*, Zürich. (1959), 1962<sup>2</sup>, S. 54–67. E・シュヴァイツァー『新約聖書における教会像』佐竹明訳、新教出版社、一九六八年、九四—一七頁。

付記

本稿は、H. Tsuchiya, “The History and the Fiction in the Birth Stories of Jesus — An Observation on the Thought of Luke the Evangelist,” *Annual of the Japanese Biblical Institute*, I, 1975 を邦語に移し、修正と増補を試みたものである。